

'It's Not Over Yet ...!' Christological Reflections On Holy Week

Brendan Lovett

「まだ終わっていない。。。」 聖週間のための沈思

ブレンダン・ラヴェット（聖コロバン会司祭）

民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。

イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。

「エルサレムの娘たち、私のために泣くな。

むしろ自分と自分の子供たちのために泣け。」

ルカ 23：27—28

### 序文 まだ終わっていない・・・

何年か前に、ドイツの小さな町で、若者たちが四旬節の日々を祈って過ごそう

と決心しました。何週間が過ぎて、聖週間の最も重要な典礼の中で、彼らは黙

想によって得たものを形あるものにして共同体に残したいと思うようになりま  
した。その町には芸術家が住んでいました。その人は彼らの教会に来ていたわ  
けでもなく、また他のどんな教会とも無縁でした。しかし彼らはその芸術家に  
助けてもらおうと決心しました。芸術家は若者たちの話に耳を傾け、彼らの話  
すイエスの受難についての理解に共鳴し、彼らの頼みを受け入れました。

彼は、教会の壁に掛けられるように、6枚の絵を製作しました。そして、若者  
たちの考えを表現したこの6枚の絵に次の様なタイトルをつけました。

「まだ終わっていない」

彼は、イエスの受難が、人類の現在も起きている苦しみの中に続いているとい  
うことを、そしてイエスの受難が、あらゆる時にあらゆる人びとと苦しみの中  
で連帯しているということを、伝えたいと願いました。このことは、遠大な、  
目下進行中のこの物語と切り離しては理解することは出来ません。

私は、この若者たちは本当に意味のある事をしたと思っています。福音書に教えを求めようとするとき、受難の物語の中で、最初で、そして唯一、イエスの言葉の中に、諫める表現と出会います。

「私のために泣かなくてもよい。むしろ、自分のため、また、自分の子供のために泣きなさい」

イエスの苦しみのために涙に暮れるだけでは、巧みな自己憐憫に滑り替わってしまい、大きく本筋から外れてしまいます。そのことは、他の誰の苦しみに対しても、涙を流すだけでは不十分であるということが言えます。哀れみよりもっと強い何か、苦しみに直面している時には必要なのです。その何かとは、その状況下にあっても、それを変えようとする考え方をもつことです。

福音書が諫めていることは、無意識のうちに起きる安易な感情であって、そのような感情のもたらす緊張感はすぐに冷めてしまい、殆どの場合、間違っ指示を与えるものです。

アニー・デイラードは、首を木につながれた雌鹿の絶望的な戦いを眺めていた時の話をしています。その雌鹿は、アマゾン上流の地域で、彼女をもてなすための夕食のご馳走になる予定でした。彼女が雌鹿を見ている間、三人のアメリカ人の仲間が彼女を見つめていました。彼らは、彼女が、雌鹿の苦境に対して、余り感情的にならないのに驚いていました。そのうちの一人の男性がこう言いました。

「もし、私の妻がここに居たら、取り乱して、“誰か、どうにかしてちょうだい”と言っただろう。」と。

アニー・デイラードは、逆に、彼らに対して驚きました。彼女は長い年月、怯まず、決然として、自然界の現実とその苦しみとともに生きてきたのです。

この苦しみが、避けられない現実であり、物質的な宇宙の美しさであるということを知っていました。自分と三人の男たちがその雌鹿を食べるということを、

そして、雌鹿が殺された同じ日のその夜、美しく、無力なその動物から、いのちをもらうのだということを彼女は知っていたのです。彼女は見当違いな反応をすることで、自分自身を満足させるようなことはしませんでした。

もっと学ばなければならないこと、始めなければならないことがあります。

感情面でもっと深い教育が。彼女はこう語っています。以前、2年間ほど、洗面所の鏡の横に、新聞の切り抜きを張っていました。それは工場の事故に巻き込まれ、もう少しで焼死しかけた男についての記事でした。言葉では言い尽くせないほどの苦しみを経験した後、彼はやっといのちを取り留めました。その13年後に、殆ど同じ事故の犠牲者になるために。

かつて、私は、ひどい火傷をして生き残った人は、往々にして、気が狂ってしまうことがあるということを読んだことがあります。彼らが自殺する割合は高いのです。医術は彼らの痛みを取り去ってくれませんが、薬は体の上をただ滑り落ち、シーツを濡らすだけです。何故なら、

身体を包み込む皮膚がないからです。患者はそこに横たわって、ただ  
すすり泣く。そして、自殺してしまうのです。火傷をする前には、知  
らなかったのです。この世にこのような苦しみがあるということを。  
そして、生き続けるということが、自らにこのような苦しみを許して  
しまうことになるということを。

福音書は、決して私たちを哀れみには導きません。むしろ、「飢えている者には  
食物を、裸の者には服を」と私たちは読んでいます。そして、より行動的な関  
わりを求めています。福音書は現代的な文化とは極めて対照的です。「良く、お  
泣きなさい」と奨励し、痛みを伴うような深い関わりを持つ事なしに、感情的  
になるだけで終わってしまうような現代の文化と。また、この文化は感情を巧  
みに操作し、物事を変えるという意欲を削ぎ取ってしまいます。苦しみと深く  
関わる事は、物事を変えて行く方向に私達を導いていくことになるのです。

もし、出来事を、単に過ぎ去ってしまうものとするなら、私達がそれに関わっ  
ていくことを不可能なものにしてしまいます。それと同じことがイエスの受難

に関しても言えるのです。これは人類の歴史から孤立している出来事ではありません。現在進行している現実の中に、取り込んで考えない限り理解されることは無いでしょう。もし、私たちが、世界のすべての苦しみと連携して理解しようとするなら、イエスの受難と適切に関わって行くことができます。イエスの受難に正しく関わっていくためには、現代社会の苦しみに、より深く関わって行けるように、心を開くことなのです。

それは、まだ終わっていない。それでは一体どのように、イエスの受難を、今も進行中の人間の苦しみに結び付けることが出来るのでしょうか。ちょうど、すべてのものに、拡散して、振り注いでいる太陽の光がレンズによって集中され、強烈な白い熱となる様に、イエスの受難の物語は、創造と歴史の中に存在する苦しみの真実と、その苦しみに関わる神の真の姿を明らかにする力を持っています。このことは、そう簡単に答えを見出すことはできないでしょう。誕生と死の神秘に直面しても、そこに、答えはありません。しかし、生きて行くことの現実に深く関わることによって、その意味に気づくことが出来るのです。そのことだけでも、私たちは十分に生きていくことができます。

私たちの信仰は、伝統的に人生に於ける最も深い真実が、この男の苦しみと死の物語の中に含まれていると考えています。この考え方は、私たちに、世界で起きている事の全てに深い意味をもたらすものとして、イエスの十字架があることを示唆しています。ですから私たちがこの世界の現実にある苦しみに心を開く事が出来るならば、その時こそ、この事を認識する事が出来るようになるのです。

エルサレムで嘆き悲しんでいた女性たちは、ただ単に嘆き悲しむだけで、現実の出来事とは、何の関わりを持っていませんでした。彼女たちは私たちと同様に、イエスに起きていることの現実の一部でしたが、自分たちも関わっている事に気づいていませんでした。

イエスは、彼らに対して、彼ら自身のために泣くように命じたのは、すでに彼らが現実に行っている事に巻き込まれているということに気づかせるためでした。このような認識を持つことによって、彼らはイエスの苦しみに、実り多

く、応えることができるのです。私たちはあの女性たちの過ちを繰り返してはなりません。もし、私たちが誠実にこの全世界を見つめようとするなら、正しい事のために（本当に、嘆かなければならないことに）涙することができるようになるでしょう。

十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です。私たちは十字架につけられたキリストを宣べつたえています。それはユダヤ人にはつまずきであり、異邦人にとっては愚かなものですが、ユダヤ人であれ、ギリシャ人であれ、召された者にとっては神の力、神の知恵であるキリストなのです。

コリント人への第一の手紙 1：18、23－24

### 月曜日 十字架に架けられた神

私たちに求められているものは正直であることです。世界は2000年の間、変わっていません。私たちは今、世界に起きている様々な出来事の中にキリストの受難物語に描かれているものと全く同じ出来事を見ることができます。しかし、このことを認めることは難しいことです。

もし、典型的な中産階級の道徳観というものが存在するならば、それは中庸を旨とする考え方に違いありません。極端なことは敬遠され、不適切に誇張された表現は問題になります。私たちはあまりに現実的なことに耐えることができません。私たちが望んでいる世界は心地よく快適で平凡であって、すべてのことが上手くコントロールされ、私自身の中にも、また周りにも何も恐れるものがないところなのです。これは偽りの嘘であっても私たちにとっては必要なのです。平穏で道理にあったと思いこんでいる見せかけの世界が否定してしまったものの中に、私たちの人生と歴史にとって本当に重要なものがふくまれています。

理解できないことではありませんが、私たちは人生と歴史にとって慰めに満ちた光景に矛盾しない神を作りだしています。私たちの持つイメージや自分に似たものとして神を捉えています。

それとは対照的に福音書で語られるものは穏やかなものではなく、生と死、贅沢と飢餓といったような対極にあるものです。イエスの十字架で成し遂げら

れたことのその眞の価値は、飾り気のない、ありのままの文体で言い表された福音書の世界の中でのみ、初めて理解されるのです。このような認識なしにイエスの十字架について正しく公平に評価することはできません。更に私たちが神に抱いているイメージを十字架を通して明解にしようとしなければ、福音書が持つ最も深い真理を見失ってしまうでしょう。

自分たちのことを考えてみると安逸が当たり前と思っている世界から十字架を見たとき、私たちは恐れという感情を伴って見てしまいがちです。

それは十字架というものが野蛮なものであり、現代に生きる私たちはその野蛮さを遠い過去のものとしてしまっているからです。私たちが聖週間で感じる不安な気持ちは野蛮なもの（イエスの十字架の苦しみ）に対する恐れからくる抑圧された感情（怒り）に起因しています。それは、何が起きたか書かれた記述を厳しい事実と受けとめ、目をそらさず対峙するよう求められるからでもあります。福音書は信じられないほど感傷的ではなく、非常に簡潔です。そこには一切の粉飾もなく誇張もありません。その一方で私たちは習慣的に無理に抑制

をかけようとしています。

私たちは福音書の物語を何か特別で例外的なものにしようとしています。

しかし、それはイエスの上に起きた恐ろしい出来事を伝えようとしているだけではありません。それが伝えようとしているのは、眞の愛がそこにある時、世界中でいつも起きていることなのです。この世界は悪だと多くの人たちは認めています。しかし、自分たちが自ら世界をそのようにしてしまったことを認めていません。私たちは神を、イエスをそして愛を信じていると思っています。

しかし眞の愛に出会ったとき、私たちは脅かされ何か恐ろしいことを求められるのではないかと感じてしまいます。私たちは愛の美しさに魅了され、恐れから開放された時初めて愛を殺すことをやめられるでしょう。

私たちはイエスの生涯、受難と死の物語の中で、この美しさに出会います。

むしろ、私たちが信じている神の概念をこの物語に基づいて作りかえることができたなら、また、この物語とはかけ離れたところにいる神に向かって

“なぜ、神は何もしなかったのか”と問うことをやめたなら、その時にこそ私たち

は初めてその美しさに出会うことができるのです。神についてどう考えるかが問題です。私たちのいのちへの道はイエスの物語の中にその物語を通して語られる神の知恵、神の力、神の愛をどう捉えるかにかかっています。

テラー司教は訪ねてきたある若い夫婦について語っています。そのご夫婦は2才になる子供を突然亡くしたばかりでした。この病気は幼いこどもが睡眠中に原因不明のまま突然死んでしまうもので、“ゆりかご突然死”と名づけられています。このような死はどんなことよりも耐えがたいことです。事故による死ならば少なくともその原因を知ることができます。しかし、“ゆりかご突然死”のような<死>にあるものは無意味であるだけで、人生には何らかの意味があるという私たちの深い信念を打ち砕いてしまいます。

彼はこの若い夫婦に神の計り知れない意志（摂理）について話すことはためられたと書いています。実際、司教が語ったことはその子の死は両親にとっても大きな悲劇であったが、神にとっても彼らと同じくらい大きな悲劇であったということでした。他になんと言えただろうか？ 必死に慰めになる答えを

与えてもらえるようにと神の計らいを祈り求めなさいと言う方が遥かに正当だと思えるのだが。

私たちは物質世界には避けられない痛みや苦しみがあるということを意識的に考えないようにしています。何世紀もかけて私たちの世界には予測できないことが起こりうるという事が分りました。何度も困難を切りぬけ、やり過ぎてきても、うまくいかない時もあります。このことは神の創られた世界に芽生えた命には膨大な代価が支払われるということを意味しています。さらにこの過程には莫大な時が刻まれ、私たちが知る限りにおいて15～20億年と考えられています。悲劇を引き起こすさまざまな要因が予測不可能であるゆえに悲劇を生み出しています。もし、神の配慮というものがあるなら、なぜ奇跡を起こしてくれないのかと思う人はこの宇宙を理解していません。それは人間らしく生きるためにはあり得ない世界を求めていることになるからです。なぜならそのことで物質的な世界を理解するのに必要不可欠な原則を排除してしまうからです。神が物質的な世界を創られたのですから、痛みと挫折が伴うことをも許さなければなりません。神の創造されたものが血の通った人間として、愛を愛で

もって自由に応じることができるなら、乳児の突然死のような悲劇の前で神は“無力”にならざるを得ません。神が両親よりもこの悲劇に対して苦しまなかったという理由はどこにもありません。もしイエスの十字架を神の啓示として受けとめるなら、またその逆も成り立つことになります。

イエスは御父に愛されていることを知っていたからといって、この世のすべてのことが容易に首尾よく運ぶなどとは決して灰めかしたりはせず、自分の都合のいいようにもしませんでした。誘惑の物語でもこの姿勢は一貫していたことを伝えています。しかし、一度だけ差し迫った恐怖から「父よ、もしできる事なら・・・」と祈り、それが叶わぬことであることも知っていました。私たちはイエスが祈りの中でこのことに気付かれ、それによっていかに力づけられ支えられていったかを読み取ることができます。しかし、なぜイエスのその祈りが聞き入れられなかったのか、その意味するところを突き詰めることに私たちはためらいを感じます。イエスと同様、私たちもこの世界に対する私たち自身の責任を果たさなければならないことを自覚しています。私たちがもつ、全能の神であるという心地よいイメージは打ち砕かれています。人間であるとい

うことはこの世界の苦しみの中に招き入れられたということであり、この苦しみをできるだけ少なくするために責任が各自に与えられています。

私たちの罪とは愛の思いではない違う目でこの世界を見て、恐怖を感じる事です。私たちが本能的に関わりたくないと感じ、わが身を守るためにあらゆる生命に対して「NO」と言って引き込んでしまうのは、何か本能的なものがそうさせているのでしょうか。非常に危険な悪の極み。そのようなものには関わりたくないはずです。もし従来から言われているイエスの十字架は私たちの問題を解決して罪をあがなってくれるものだというならば、そこには眞の神との一致がなければなりません。神、全能の神の力は全ての人、すべての物を無視してこの世界を変えようとするのではなく、神の力はまず無限の愛の中に無限の弱さとして示されたのです。

イエスの祈りは沈黙の中にありました。何の答えもありません。しかし答えが無いということはあることでした。もしかしたら慰めの言葉ぐらいはかけられたかもしれませんが、その様に考えることは私たちを安っぽい感傷に浸

せるだけで、意味のないことです。ただそこには沈黙のみが存在しただけです。

パウロが伝えるイエスの苦しみと死によって明らかにされた神の真理とは；

- 私たちの考えているような神ではなく
- 私たちが誇りとするようなものでなく
- 私たちが希望をかけるようなものではなく
- 私たちがこの世界をつくりあげていくためのどんな価値観とも一致するこ  
とがない。

それは実際、私たちの持っている知恵や知識を根底から揺るがすものです。

私たちがこの一週間をとおして格闘することがらは世界をひっくり返すほどの  
価値観の大きな転換をもたらします。

私たちは生きることへの憤りで抑圧的な世界を作り上げてしまいました。

本当に愛する事ができる者を殺してしまうような世界を。愛であり、神の力、  
知恵であるイエス。いのちを愛し、どのように生きていくかを私たちに示され  
たそのイエスを。私は十字架に架けられたイエスの顔の中に神の顔を見るまで  
はこの抑圧された世界は作り続けられると考えています。私たちはその真理の

美しさに魅了される必要があります。そして人間に与えられた使命の美しさにも。神は愛によって神の創られた宇宙を苦しめられ、そうすることによって愛の中に答えを見出すことができるようになるであろうから。これこそ神にとって最も大切なもの—愛による自由ないのちの応答—が明らかになっていきます。私たちににとって最も意味のあることは、いのちに対して“Yes”と言えることです。宇宙は 20 億年の間、それを待ち続けています。

イエスの受難と死に関わっていくということは神の創られた宇宙の本質を発見することです。そして神の働きを感じ分かち合うことです。この銀河系宇宙や私たちの住む地球の誕生に見られる神秘と真理を見出すことによって私たちは愛に抱く恐れをなくすことができます。そこには計り知れない慈しみがあり、私たちのあらゆる苦しみを覆います。この神秘とその真理は私たちがイエスの受難の物語を神の物語として読むことができた時、はじめて手に入れることができるのです。

イエスの受難と死について知ることが御父の真理へ人々を導くことにならな

いことは悲しいことです。この聖週間の中に最も重要なことは信仰に基づいた  
生き方です。

ウエールズ人のトーマス (R.S. Thomas) の詩は、ここ数十年にわたり私たち  
にとって信仰と疑惑の間にある“終わりなき戦い”についての感動的な証言とな  
っています。ここに挙げるのは彼の詩の一部です。

わたしが読んだ本の中で

神は愛であると— しかし本からはなれると

私はそのように思えなかった。

私が求めている一つのこと

生きる意味についての答えとは

その真理は美に従うこと

しかし、それは聞き届けられないこと。

私たちの多くはトーマスの心情に容易に共鳴できます。憐れみ深く愛して下さる神という概念からはある種の期待感を持ってしまいます。しかし歴史の中でこれらの期待感が打ち砕かれるのを何度も見てきました。多分私たちは先ず第一に、その基になった概念や経験が福音書を拠り所に行っているということをおぼえて忘れてしまっています。“本を読んで”そこに“神は愛である”という記述を目にしただけでは十分ではありません。物語の中に深く入り込んで、いったいこれは何の意味があるのか見出す必要があります。そうすることで歴史の中にある神秘の真理に気づき、私たちが期待していた思いは大きく修正されるでしょう。

昨日の黙想の終わりに、世界の苦しみに私たちはもっと深く関わっていくべきだと感じました。そうすることによって受難物語をもっと豊かに味わうことができます。さらに神が私たちの世界の苦しみと、どう関わっているか知ることは前のステップと同じように大切なステップです。この第二のステップを前進させることによって第一のステップも前進させることができます。イエスの物語の中に示された神の眞の知恵や力を垣間見ることによって、私たちの人間

としての使命である憐れみへと導かれます。

さて、見張りをしていた者たちは、イエスを侮辱したり殴ったりした。そして、目隠しをして、「お前を殴ったのはだれか。言い当ててみろ」と尋ねた。そのほか、さまざまなことを言ってイエスをののしった。ほかのも、二人の犯罪人がイエスと一緒に死刑にされるために、ひかれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に十字架につけた。その時イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」

ルカによる福音書 22：63－65；23：32－34

## 火曜日 悪のミステリー

フーブ・オーステフィ(Huub Oostehuis) の祈りの断片が私の心に残っている。

主なる神よ、

私たちは世界の罪を見ている。

あなたの独り子である御子の光に照らされて、

彼が来たのは

あなたの私たちに対する憐れみの心からです。

私たちは気づくようになった。

いかに 頑なで 冷酷であったか

お互いに対して・・・

イエスの到来によって明らかにされたことは悪にとらわれ、悪を犯す自分達の姿とその悪の本質です。この受難物語が驚くほど簡潔な言葉で表現されているということはすでに示唆しました。作者は感情的に誇張して書いたりしていません。文学的な気取りなどありません。むしろそこにあるものは、犠牲者に対する押さえつけることの出来ない敵意と憎悪です。これをどのように理解し、また、私たちが捉われてしまった悪の循環にどのような光を投げかけたらよいのでしょうか。その答えは私たちがこの世界について知っている全てのことを受難の物語と関連づけて考えていくことの中にあるといえます。

それにはまず、ジョン・テラーはアムネスティー・インターナショナルの報告書を熟読するように薦めています。この報告書から私たちは次のようなことを知ることができます。つまり、政治的恩恵があるにもかかわらず、無力な

男女が単に無力だというだけの理由で拷問や残虐な仕打ちを受けています。彼らより力を持っている者たちのなすがままになっているのです。その報告書が伝えているものが全てではありません。もし、私たち自身の心の奥を見つめてみるなら、そこに何かが見えてくるに違いありません。34 節にあるイエスの言葉を読めば、愛よりもっと上にある何かがどんな弁解の余地の無いところで弁解しようと試みても、イエスが持っている私たちの心を見抜く力で見抜かれてしまうでしょう。

何年か前、セバスチャン・ムーアはジョン・ル・カレの「寒い国から帰ってきたスパイ」を読むことによって英語圏に住む人々は原罪についての感覚を取り戻すことができるだろうと指摘しています。その小説は人々が納得している現状を疑いも無く、何気なく維持していることが結果として罪のない人を死に追いやってしまったということをうまく伝えています。善と悪に対する私たちの典型的な固定観念は真実とは全くかけ離れたものです。それは結局のところ立派な教会の体制であり、更にそのことがイエスを裁判によって死刑に至らしめたということは明白な事実なのです。

< 馴れ > が過ぎると私たちは盲目になります。芸術家は私たちの目を開け、再び見ることができるようにしてくれます。アラン・エクルストンは彼の作品“Yes to God”の表紙のイラストにルイス・オズマンの鉄製の彫刻の写真を使いました。そのオリジナル作品は2mの高さもあり、一見するとそれは輪のついた十字架に見えます。さらに良く見ると、その輪にはギザギザの歯が何本かついていて、輪の上部と下部には強力なスチール製のスプリングが一つずつ十字架の縦の柱にしっかりと取り付けられています。そのスプリングには留め金がつき、それを外すと輪の上と下がパシャという音を立てて閉じる仕組みになっています。それはちょうど熊を捕まえるための罠のような精巧な道具を見ているようでした。しかし、芸術家がここで言いたかったのは、それは人間用の罠なのだということです。その罠はナツメヤシの枝を手にとろうとする者は（ヨハネ12-13）または、支配や搾取のない世界を求めようとする者は誰でも二つに引き裂いてしまうために作られたものなのです。それはより人間らしい秩序を切望する者に対して、その社会の”法と秩序“を守るために使う恐ろしい脅しの道具です。

この芸術家によって、ローマ帝国における十字架の歴史的機能とその実態（真の意味）を今さらながら気づかされます。十字架はまさに拷問によって人を死に至らしめるための道具でした。そのおどろおどろしい形は人々をおとなしくさせるには十分でした。人を殺す道具としては最も屈辱的で最も苦痛をあたえるように工夫されているものでした。またそれはローマ帝国の力を見せつけるために意味があり、ローマの支配による平和の恩恵を察知できない者を徹底的に排斥するという姿勢を誇示するための手段にもなりました。

しかし私たちが注意を向けなければならないのはローマ帝国だけではありません。人間社会というものは反体制の批判から見を守ろうとするのが常であり、そのために人を捕らえる罠を用意しています。そして、犠牲者に対する仕返し  
の残忍さこそは私たちが認識しなければならないことです。この無抵抗な犠牲者に対する極端な憎しみはどこから来ているのでしょうか？それは受難物語の中にアムネスティー・のファイルの中に見出すことができます。犠牲者が犠牲者であるということで嫌われています。そこにはどんな意味があるのでしょうか？

すぎましい拷問は犠牲者が倒れるまで続きます。その時、犠牲者は怒りをたぎらせるか泣き崩れて降伏します。犠牲者が倒れるまで拷問する人間は凶暴であり続けます。犠牲者は男も女も憎しみに対して復讐心を持たないことで人間としての尊厳を保ち、その拷問者に対してさえ人間らしい関係を持ち続けようとするのです。そして結果的に犠牲者は拷問者より強いということを示す事になるのです。人間らしい世界をつくりあげていくために労力を惜しまない。それゆに拷問する者の激しい怒りをかう原因となるのです。恐怖にさらされ、力なく屈服した犠牲者はもっと人間らしくありたいという気持ちを犠牲にして裁かれます。犠牲者は私たちがこころの奥深くに押し込んでしまった人間らしさに立ち向かわせます。それは私たちにとって耐えられない状況なのです。

権力下に身を置くということは人間を屈辱的な立場に置くということです。私たちはこの権力を求めていながら、この屈辱を忌み嫌っています。犠牲者が犠牲者であるということだけで嫌ってしまい、私たちの身近な貧しい人であれ愛すべき人であれ、私たちがつくりあげた競争社会の中で敗者として運命づけ

られた人間は誰でもその対象となってしまうのです。

犠牲者が潔白であればあるほど私たちの中により強い敵意が生まれます。なぜなら彼らによって過酷で耐えがたいほどの非難を受けることになるからです。私は兵士たちがイエスにしたと同じような扱いをバラバにしたとは考えられません。兵士たちにはこの男を嫌う理由が十分にあったからです。バラバは彼らの支配下にあったが、イエスに対して示されたような憎しみの感情を掻き立てるようなものはもっていなかったのです。私たちが人を嫌いになるのは多分、自分たちに危害が与えられたり、それによって影響を及ぼされると考えられる時です。また、自分たちが人に危害を与えた時ほど、なおさら人を嫌ってしまうのではないのでしょうか。

このことから、イエスではなくバラバが選ばれたことに私たちは驚きません。バラバの事は問題ではないのです。もちろん彼は危険な人物です。しかし私たちの社会には軍隊も警察も牢獄も用意されています。彼の言動の全てが私たちが正当化させる理由を与えています。彼はピラトに対してもピラトが行使した

のと同じような力を行使したということで、ピラトにも正当化の理由を与えています。ピラト自身もバラバのような人間によって彼自身を正当化させる必要があったのです。バラバは基本的に私たちが望んでいたことと同じような事を彼も望んでいたということで一般群集をも正当化してくれるのです。

バラバの役割が変わっても、私たちの世界での基本的な力関係は変わらないのです。その一方で、イエスは私たちがとっくの昔にご都合主義という祭壇に生贄として葬り去った人間性を取り戻すようにと私たちを立ち向かわせようとしているのです。この二人のうちバラバは私たちに敵意をあまり起こさせません。人間となって、人間として苦しむことを通して和解をもたらそうとした神のその弱さはどのような人間の権力よりも私たちに脅かします。

聖書はイエスの受難における群衆の役割についても言及しています。群衆は何も考えず簡単に操られてしまいます。しかし、彼らのうちにある憎しみの感情について掘り下げてみる必要があります。彼らは多分、イエスが何者であるか全く理解していませんでした。彼らが分っていたのはイエスが時の組織と衝

突していたことぐらいでした。その組織とは彼らを抑圧していたのと同じ組織  
なのです。それなのに彼らはイエスを“十字架につけろ”と叫んだのです。何も分  
らずに？多分ある程度までは分っていたとしても同じことをしたでしょう。私  
たちは人間であるということの“もろさ”と直面するよりは自分たちの中にある  
悪を我慢するほうが恐ろしくないのです。

これらの全てのことが悪の本質について多くを語っています。聖書の中で罪  
の典型的な例として“エジプトで贅沢な暮らしにうつつをぬかす”話があります。  
ここで伝えていることは真の自由への開放を拒んだということです。この例で  
も分るように私たちが善を行おうとする時、いかに大きな悪が行われてしま  
うかということです。私たちにとって何が価値あるものあるかと選択する際に私  
たちを死から守るために何をしたらよいか決めます。宗教的な制度を含めて、  
生を促すために私たちの組織は作られていますが、結果として死をもたらすこ  
とで終わっています。その制度に犠牲者がでるということは、その制度が不当で  
あるにもかかわらずその事実を認めようとせず、また、変えようともせずに犠  
牲者を犠牲者だと言う事で責めてしまうのです。

ジョン・テラーは私たちが持つ憎しみと攻撃的な心の根源にしっかりと向き合うことの必要性について示唆しています。私たちは誰に対して心の奥底に怒りを常に抱き続けているのでしょうか？その怒りはいのちとそのいのちの与え主に対して向けられているのです。歴史的にみて、恐れと憎しみが具体化したものが軍需産業と呼ばれるもので、怒りと苦痛を伴います。それは、いのちを無駄にすることへの憤りと、人生が求めているものに直面してどうすることも出来ない虚しさから来ています。私たちが憎んでいるものはこの様ないのちを作った神なのです。

私たちは神を憎んでいるということをそう簡単に認めようとはしません。この事で心の難しさや人間であるという事実をなぜ認めることができないかわからないからです。福音書が明らかにしたことに関わっていくことは神と和解することになります。私たち人間をか弱い存在として造られた神を決して許そうとしない私たちが。

イエスは十字架から語られた言葉の中で私たちに対して何の言い訳もなさいませんでした。そして私たちの心に無意識に起こっている悪への傾きについて指摘されています。イエスはそのことについて非難されなかったので、私たちは自分のいのちを自ら十字架にはりつけ、その上、他人のいのちさえも礎にってしまうようなものと立ち向かうことが出来るのです。

イエスに起きたことを通して受難物語の中で、私たちは他者の中に見つけた悪と同じものを自分自身の中にも見出す事になります。この自己認識こそが私たちの悪に対する葛藤を衰えさすどころか、かえって悪に対して創造的な力を発揮させます。この創造的な葛藤は連帯感と憐れみに基づいています。この憐れみの心は迫害者を迫害する側に立たせてしまったことに対する理解や、自分の中にも悪があるという自己認識を促します。

創造物のためにすべての苦しみを自ら甘んじて受け、全世界のためにすべてを引き起こすことのできた愛の真実、取り消されることも無く与え続けられる愛、そのような愛によって揺りうごかされることを私が受け入れられたら、私

私たちは次のステップに進むことができるでしょう。人間が今、置かれている状況への苛立ち、いのちの与え主である神への憤りを止めるためには、この愛に思いっきり揺り動かされる必要があります。私たちは傷つきやすい人間の弱さゆえに、創造物（被造物）に対して憐れみ（共感）の心をもてるようになるかもしれません。私たちは愛と許しから来るいのちを生きることが出来るようになるかもしれません。その時こそ犠牲者が犠牲者であるという理由から責められることはなくなるのです。

ウジヤ王が死んだ年のことである。

わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっばいに広がっていた。上の方にはセラフィムがいて、それぞれ 6 つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。彼らは互いに呼び交わし唱えた。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」

この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。わたしは言った。

「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。

汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目には

王なる万軍の主を仰ぎ見た。

するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んできた。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火を触れされて言った。

「見よ、これがあなたの唇にふれたので

あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

その時、わたしは主の御声を聞いた。

「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」

わたしは言った。

「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」

主は言われた。

「行け、この民に言うがよい。よく聞け、しかし理解するな

よく見よ、しかし悟るな」と。

イザヤ 6:1 - 9

### 水曜日 私たちの希望のしるし

逆説的に聞こえるかもしれないが、“不正の神秘”を私たちに明らかにしてくれたイエスの十字架での出来事は、私たちにとっては十字架が希望の根源であるということを示してくれたのです。エルサレム郊外の丘の上では、悪の啓示よりもっと多くの事が起こっていました。悪の啓示は、より多くのことが起こることによってのみ可能になります。

十字架にはわたしたちの救済ということよりも、もっと深い真実があり、その深い真実こそが私たちを救いへと導いてくれるのです。自分がどのように生きていこうかと考える前に、罪の意識を無意識のうちにすでに持っているということはこの章の始めに引用されたイザヤ書は良く言い表しています。天使によって捉われた思いが開放されるとすごく自由になって直ちに神の求めに応じられるのです。「はい、私をお使ください」と。そして、平和やいのちを造り出すという困難な仕事が始まることを見ることや聞くことが出来ない人たちに知らされるのです。

実際、どんなに真実性のあるメッセージも、また生命あるものを造られた神の言葉であったとしても、私たちがいのちを守るために築いた壁を乗り越えることは難しいことです。いのちの源であるイエスはわたしたちの守りの姿勢を根本から打ち砕くためにメッセージはルカ 23-24 で語られた言葉に集約されています。「父よ、彼らをお許してください。彼らは自分が何をしているか分からないのです」と。

イエスが裁判によって死刑に処せられたのは真実です。群集の要望に応じて宗教界や市当局のリーダーたちによって殺されました。しかし、神の名によって生きるという生き方に固執したためにこの男が群集の残虐な仕打ちを促した事もまた真実です。イエスは神がこの世にもたらそうとしたいのちに誠実であったために死んだのです。イエスの十字架に希望を見出そうとするなら、このイエスの生き方に私たちは注意を向ける必要があります。イエスは神を“私たちの神”であるという真実を伝えるために死んだのです。神がこの世にもたらすであろう未来と神の王国に対する忠誠のために。そして、いのちを憎み、真の人間らしさを忌み嫌う私たちを愛するがゆえに死んだのです。その死に方を通して神の真実を明解に知らせようとしてしました。この真実こそイエスが伝えようとした“よい知らせ”でした。そしてこの真実こそ、私たちがこの聖週間を通して目を凝らして見つめなければならないことなのです。

後にこれらすべての事柄は、イエスが父への従順から、また父の望みを果たすために死んだのだというように単純に簡略化して結論づけられてしまいました

た。しかし、父はイエスを死なせるためにこの世に送ったのではありません。

むしろ父はイエスを一人の愛すべき人間として人生を十分に生きて全うするよ  
うにとこの世に送ったのです。それは、私たちが作り上げてきた世界では、イ  
エスが十字架に磔にさせられるだろうということを意味しました。イエスに起  
こったことはこの世界に人間として来られた（受肉した）方の愛に対して起こ  
っていることなのです。私たちが結論づけてしまったことに目を向けても、そ  
こには未来がありません。その“良いしらせ”とは愛が持つ創造的な力に重点をお  
いています。このような簡略化の最大の欠点はイエスが生き抜いたという良い  
ニュースの最も大切な部分を不鮮明にしてしまったということです。全ての人  
間の惨めさや痛みを“NO”というその熱烈なる神の心を。

イエスの受難と死を深く黙想したいならイエスの生涯とその核にあるものに  
対して決して目をそらさないでほしい。その大きすぎるほどの喜びと心が捻じ  
曲げられてしまう程の激しい痛みの生活すべてがこの男のスクャンダラスな  
信念に対する神から贈られた恵みでした。彼は自分を無にして神に応えるため  
にその全生涯を神に捧げたのでした。限りない憐れみで人間を抱きしめようと

しているその神に。天の高みから私たちのところへ届く夜明けの光の中で、生や死に対するどのような恐れも彼を支配することはなかった。イエスの信念に少しでも影響されて心を開いた人々にとっては、イエスがいるということで悲しい気持ちになるということは決してないのだと悟りました。このことが、イエスが訪れたあらゆる所でお祝いの食事が持たれたという言い伝えの背景になっています。

神の国に夢中になっているこの男の魅力に魅せられた人々はとっくの昔に彼ら自身の中で十字架につけて亡くしてしまった願望一愛によって生かされる生き方に自分自身を捧げたいと気づくようになりました。人間の傷つきやすい弱さから自分自身を守っていこうとする試みの最初の犠牲者となったのです。

今、全宇宙の源である神によって彼らの安全が保証されとことで、その心を再び取り戻すことができたのです。少なくともイエスがそこにいて彼らを励まし続けている間は。

イエスによって明らかにされた神の国から本物の贈り物を保証として受け取るということは他から来るどんな保証も一切、手放すことを意味しています。

それは、支配的で利己的な権力行使の終わりとして不正義の徹底的な根絶を意味しています。「良い知らせ」は先ず貧しい人に明らかにされました。貧しい人にだけです。人々は彼らが貧しい人と同化した時のみ救いに預かることができます。

無条件に贈り物を受け、その贈り物に純粋な感謝を捧げながら生きるためには他の全てのものを放棄することになります。このことが意味することを具体的に言うなら、貧しさを生む不公正な社会構造から自分自身を切り離すことであり、その生涯を貧しい人たちの戦いに連帯して生命を生きし続けていくことなのです。

私が以上のことを強調したのはジョン・テラーが述べている懸念のためです。彼が危惧することは教会というものは愛に基づいて正義のための戦いの中に自らを投げ出す用意ができていたのだろうかということです。

そしてその結果として、正義を実現するために必要などんな意見も一不正義を

無くすための歴史上のいかなる戦いも来るべき神の国に勝利を簡単にもたらし  
ことはできないだろうという見解ですら、現実逃避になりがちな私たちの無神  
経さを正当化するために使われてしまっているのではないだろうか。

彼が出した堅実な結論は、そのような危険があるにもかかわらず、キリストの  
真実とは譲歩する余地のない事実であるということだ。私は神の国の到来の遅  
れを、また、正義を実現するための闘いの長期化を一番に心配しているのでは  
なく、その闘いの中にある愛の重要性を第一に考えています。私が特に恐れて  
いることはイエスの生き方の最も特質的なものが、ちょうど虐げられている  
人々の闘争心が弱められてしまうのと同じように、排斥されてしまうのではな  
いかということです。もしこのようなことが起こるなら、イエスがもたらした  
神についての開かれた真実はもはや無くなってしまおうでしょう。

イエスの実践してたことはのっぴきならないスキャンダルに満ちたものであ  
ったが、洗者ヨハネの行動にも明らかなように、まず、悔い改めがあり、そし  
て霊的な一致、和解、交わりを持つという一つの仮定をひるがえすものでした。

イエスにとって全ての人々に提供される霊的一致が神の国の真の表明でありました。この価値観の転換はいつも罪びとと一緒に食事をしていたというイエスの食事の習慣のなかにはっきりと伝えられています。

彼をこのような行動に駆り立てたのは来るべき神の国の真理でした。イエスの確信するところによれば、神が関心をもっていることはたった一つのこと、すなわちそれは“人々の幸せ”でした。神は人々に喜び、平和、いのちが十分に満たされること、また、これら全てのものを尽きることのない寛大さと愛に満ちた無条件な贈り物として人間に与えることを望まれました。人々の過去は神のこの法外な寛大さの前では全くとるに足りないものでした。神の贈り物を前にして何も主張する権利がないのだと気づいた者は、まるで幼い子供のようにその贈り物を受け取りました。私がすでに強調したように、贈り物を贈り物として受け取ることは悔い改めた者の姿であり、そこに一つの新しい生き方が必然的に含まれるのです。

この神の国の宣言と実践はそれを受け入れない者たちにとっては破壊的で冒

流に満ちたものを感じられました。そしてそのことがイエスの死を招いたのです。イエスは彼が生きたように死んでいったのです。イエスは変わりませんでした。悪にたいして悪をもって返すようなことは拒否し、善を行うことを飽くまで固守し、そのような生き方を通して悪に対抗して最期まで苦しみ続けました。イエスの死は自ら明らかにされたことや、その生き方による必然的な決着でした。神の国は手の届くところにあり、それ故、今生きる道は一つしかないのです。イエスは神の真理からはずれることなく憎しみや暴力と対峙されました。苦しみながら人々のために死んでいったイエスの死は、神が愛したように愛したということを何の疑いもなく明らかにしました。日の光がすべての人を照らすように、神は無条件に愛を降り注ぐ方なのです。

このように最期まで貫き通した生き方によって、イエスの死は来るべき神の国の神についてのあかしとなりました。その全生涯を通して神が行うように行うことを身を持って示そうとされました。苦しむ人々のためになすべきことをイエスは創造力あふれた“神の指”を通して行いました。神の国への忠実さがイエスをやむなくこの場に導いたのです。それ故イエスの死は神が何者なのかとい

うことのもっとも完全で歴史的な表現となりました。それは勿論、イエスを十字架の死に追いやったのは私たちでしたが、どんなこともイエスに父の真理を裏切らせることはできませんでした。イエスは愛しながら死んでいきました。けっして憎しみながらではなく。最もつらい苦しみの中で、イエスは神の失墜（ブーバー）と神に見放されたことを経験しました。そしてそれらのことを私たちのために受け入れたのでした。

この様にしてイエスは神自らののちを与えた人間に暴力を加えるよりむしろこの世界から抹殺されることを望まれた方として神を明らかにしました。十字架につけられたイエスによって神は決して侵されることの無い立場にありながら、創られたものの中で最も低いところにご自分を置かれた方とされました。神はされこうべの丘において、先ず第一に神に造られ、その歴史が始まって以来のすべての犠牲者、無力で傷つけられやすい全ての弱い者、神に見捨てられた者と同一なる者としてご自分を明らかにされました。

神は暴力を使われたい。神の子であるイエスを十字架に架けた者たちに対し

てさえも。神は暴力を使うことができない。なぜなら神は愛そのものだから。  
ちょうどイエスがそのように生きられように。されこうべの丘で、全くなんの  
咎めの声も聞かれませんでした。なぜなら、イエスは父に対して非の打ちどこ  
ろのない誠実さをしめされたので、神の中に咎める心は全くおこらなかったの  
です。

神の国はまさしく到来する。しかし、苦しみの中の愛の力のうちに。愛は罪  
ある者の苦しみと罪無き者の苦しみを区別されない。このことは私たちにとっ  
て驚きです。しかし、まさにこの事が神の中に咎める心がないということを暗  
黙の内に示していることなのです。愛にとってあらゆる苦しみは汚れの無いも  
のであり、神はただその苦しみを取り除くことだけを望まれています。しかし  
その愛は人々に苦しみをもたらす全ての不正義と虚偽に対して容赦ない厳しい  
姿勢を貫いている愛と全く同じなのです。ここで私たちは神の真理の中にイエ  
スの正義の実践が愛に基づいたものであることに気づくのです。

昨日の火曜日、私は世界の悪は私たちが良いものだと判断し、選び取ってき

た結果がもたらしたものであるということについて、ある程度触れてみました。

私たちが決め付けてしまった事柄に対して何の疑いも持たないでいるなら、厳格な正義が宇宙を動かしているものと同じ法則に従ったものであるとするなら、それが私たちにとってどんなに恐ろしいものであるか分らないだろう。もしそうであるなら、私たちの誰も生き残ることは出来ないのです。贈り物の受け手としての私たちが、本来の姿を忘れてしまうことによって親切でもなく優しくも無い正義を理想的なものとして容易に私たちは受け入れ、共鳴させられてしまうのです。イエスが不正義に対してもっと妥協的であったなら、死に至らしめられることはなかったでしょう。問題なのは正義を求めることを後回しにしていることではない。この世に存在するあらゆる無条件の愛に基づいた正義を生きるということが大事なことなのです。そこには人を罰しようと言う願望はなく、もっと充実した人生を生きようという希望があるだけです。

私たちのテーマは希望です。されこうべの丘で明らかにされた神の真理に基づいた希望であって、それは果てしなく広がる無限大の希望なのです。私たちは最悪のことをしてしまいましたが何も変わりませんでした。この世界にある

愛を殺してしまいましたが、万物の創造主である神の尽きることのない憐れみ深い心を変えることはできなかつたのです。咎められる事が無いことで私たちは新たな悪を自由に生み、そこにまた生きるのです。本当の意味での生は十字架のもとで自らがいのちの殺害者であると気づいたときに始まるのです。そしてそれでもなお、限りなく大切に愛されているのだと知ることなのです。

しかし、そこに生きるようになるためには、私たちの悪を許してくださる神の愛に応えることです。それは神の痛みの中に入るように招かれていることを知ることにあります。その痛みは世界と共に世界の中から、そして世界のためにあります。解放された男女たちはこの造られた全てのいのちのために、神と共に苦しむことなのです。

すでに月曜日の話の中で、なんの説明も理由も無く、いきなり最愛の息子を失った両親の苦しみについて語りました。理由を説明することも、それを正当化することも出来ないのが物質界の真理です。そこには何の答えもありません。苦しみという現実は、造られたものとしての限界に根ざし、罪と苦しみの間に

は何の関連性もないのです。苦しみについて答えを求め、私たちの心配事に終  
止符を打とうと試みることは人間性を失わせる現実逃避であるといえるでしょ  
う。神学はヨブ記のレベルを下げないよう努めるべきです。神義論と呼ばれる  
ものは人間の苦しみに直面して神を正当化するという考え方を可能性のある研  
究とはしていません。そこには受け入れられるべき答えは存在せず、その問題  
から逃れられる方法もありません。なぜならその問題とは“この世界の開きたい  
のちの傷口”に他ならないからです。

イエスの十字架によって神が人間の苦しみを望んでいないことを私たちは知  
りました。神は全ての苦しむ者たちの側に立っておられます。これもまた、何  
の答えにもなりません。それは神がそうであるように、いのちを愛することと  
苦しむことの始まりなのです。私たちは簡単に正義を実現させることは出来な  
い傷つきやすく弱い者ではあるが、神に造られた善なる者として将来を約束さ  
れた希望へと招かれているのです。それはこれからも生ずるであろう悪を止め  
られないかもしれず、それでも愛によって良きことを求めようとする事への、  
招きなのです。神がすべての創造物のために危険を冒してくださったように、

私たちも同じように生命を賭けて生きることへの招きなのです。

十字架は私たちの救いにとって、鍵となるものです。つまり、憎しみの中にあって、愛するということを納得させてくれる最高の証といえます。これこそわたしたちの希望の鍵です。なぜなら、それはすべての希望の礎となるものを私たちに示されるからです。一創造主である神の真理と正義を。

はっきり言うておく。一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。

だが、死ねば多くの実を結ぶ。自分の命を愛するものはそれを失うが、この世で自分の命を憎む者人はそれを保って永遠の命に至る。

イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。

ヨハネ 12 : 24 - 25、13 : 3 -

5

**木曜日 死ぬことによって生きる**

復活について言及する前に、十字架を希望の源として語ることは不思議なこ

とのように思われるかもしれませんが。しかし、私たちが集中して取り上げてきたことは、十字架におけるイエスの中にこそ神の現在があるということでした。そしてその現存こそ誠意にあふれた存在であり、その存在がこの復活を通して働くのだと分るようになります。されこうべの丘では罪のあがないだけが行われたわけではありません。そこでは、イエスが貫かれた生き方を通して神の真実と神の創造の目的が明らかにされました。復活に対する信仰はキリスト教においては神の創造した世界を信じることなのです。

死の前に永遠のいのちがある。福音書はそのことをイエスが死ぬまでの生き方を通して示しています。神の心はイエスがいのちを受け入れたことによって明らかにされ、死に対して愛を持っていのちを明渡した時、神から与えられる永遠のいのちが存在します。これが未来をもたらすものです。“もし私たちがイエスのような死を通してイエスと一体になれば・・・”これはパウロが強調したことです。このような死こそ、はかなく終りのあるいのちを受け入れ肯定し、愛することから生じてくる死なのです。

そしてこのことが、冒頭にヨハネ福音書から引用した二つの中で最初のメッセージが伝えようとしていることです。すなわち、“実り豊かであること”、“土地が肥えていること”、“いのちの与え手が存在すること”、“すべてが死と結びついていること”、“新しいいのちのためにいのちを手放すこと”など。このような死は希望があってはじめて可能なのです。しかし、その一方で希望のないところで死はまさに何も生み出しません。自分自身の保身に躍起になったり、はかなく、か弱いいのちに心を砕くことを止められたら、ある意味で、いのちある死に乗り出すことができ、苦痛を免除され、神に近づくことができるようになります。

私たちの希望の拠り所は神の慈しみによって創造された世界と共に、イエスによって示された神の存在です。イエスは神について説教されませんでした。むしろ神の国について、愛に満たされた世界に神がもたらす未来について説教されました。私たちに神の“身近さ”を証明するために取られた方法は、そのいのちを完全に生き貫かれ、傷つきやすいいのちのために無条件に奉仕することでした。この来るべき神の国についての提案が拒絶されたとき、イエスの死は確

実なものとなりました。近づきつつある死を予告したなかで、どのように集約し、受け止めていったのか私たちには察することはできません。イエスはそれを信仰の暗闇の中でやらなければならないような状況に立たされていました。

しかし、彼はやり遂げました。そしてその終わりの時まで徹底して友人達と一緒に最後の食事を祝ったのです。その食事は別れを希望のある物に変えました。この最後の食事の意味をイエスが多くの人々と共に分かちあった今までの食事と無関係だとすることはできません。さらに、死の刻印のある食事をもたらししたイエスの生き方と無関係だと理解することもできません。福音書のあちこちで述べられているイエスのメッセージはこの食事の意味をさらに深めてくれます。

この食事について二つの伝承があります。それは共観福音書とヨハネ福音書です。ヨハネはイエスが弟子たちの足を洗ったことを詳しく書いています。(今週、初めて私たちの黙想はその日の典礼と一致しました。つまり聖木曜日) 私はこのことと密接に関連のある福音書の中の物語を黙想することによって、そ

の意味を深めたいと思います。それは、「福音書が語られるところではどこにあっても決して忘れられることはないだろう」とイエスに言わしめたある女の物語です。この女の行いは福音書が伝えようとしたことを一挙に把握できるほど明瞭なものでした。この女は事態を正しく理解していたのです。

ベタニアのマリアはイエスに香油を注ぐことによってイエスが弟子の足を洗うという場面の先取りをしました。このことによって彼女はヨハネ 13-17 でイエスが熱心に教えられた弟子としての精神を具体的に実践したのです。ヨハネ福音書に対してイエスの復活の概念が強調され過ぎているという誤った憶測があり、そのためにイエスの死の現実が否定的に捉えられたり、軽視されがちです。そしてこの説ほどヨハネの伝える真実からかけ離れた者はありません。共観福音書のどれもその死についてヨハネほどはっきりと詳しく述べられていないのです。ラザロ物語には死の腐敗臭が漂っています。死の脅威がイエスのこの世の旅の歩みに常につきまといっていました。ヨハネは一瞬たりともその死を忘れさせてくれません。このことは特にベタニアの物語の中で明らかにされています。また「あなた達はいつも私と一緒にいられる訳ではない」というイエ

スの厳しい忠告のなかにも。近づきつつある死を目前にしてイエスだけは何が起るのか理解していました。イエスとこの女だけが。

弟子たちは心が鈍く、理解に疎い状況にあったが、この女はこの事態を正確に受け止めていました。彼女は近づきつつある死を直感的に理解し、それに応えたのです。彼女は何も尋ねなかった。死に直面している時、人は死にいくいのちを愛さずにはられません。死が迫り来るいのちを愛し、いのちがいかに尊く、かえ難いものであるか、あらゆる方法で示さずにはられません。他の違った状況であつたら彼女の取った行動はとっぴで途方もないことであつたかもしれません。しかし避けられない死と直面して彼女はその場に最も相応しく適切なことをしました。「この人は私の体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた」（マタイ 26-12）とイエスは彼女を称賛してこのように言ったのです。1 パイントの高価な香油をイエスの足に注いだという彼女の向こう見ずな行為は（マタイによると頭に注いだ）愛は死よりも強いということを身を持ってイエスに示したのです。すべてが終る死という致命的なものに対してベタニアのマリアのこの創造的な反応は、福音書の精神である信仰を具体的に表現した

ものです。その信仰とは、いのちを神からの贈り物として信じることであり、死の脅威のもとでいのちを受け入れ、裏切ることなく生き貫くことなのです。

イエスは信仰という贈り物を私たちのなかにもたらしてくれました。その信仰とは神を信じることであり、いのちに奉仕することなのです。

もし、私たちがマリアの行為をイエスが弟子たちの足を洗うという場面の前触れとして見るなら、13～17章で述べられているような弟子としての精神を彼女はすでに持っていたと言えます。それは奉仕者としての弟子の精神です。イエスは自ら弟子たちの足を洗うことによって彼らにイエスに従うことの模範を示しました。それは、いのちの奉仕者になることであり、いのちの為にいのちを注ぎ込むことを意味しています。食事中に弟子たちが終り無く質問を続け、それでも状況を理解できない戸惑った様子はイエスを失うのではないかという漠然とした不安や悲しみ、「何故このようなことになってしまったのか」といった暗黙の叫びなどを露呈していました。この場のイエスの説教は彼らを慰めました。しかし、ベタニアでは別れの説教はありませんでした。マリアにはその必要はなかったのです。

死はその厳しい現実に敢然と立ち向かうことによって乗り越える事ができることを彼女は行動によって示してくれました。さらに死は見苦しく強烈だが愛はそれよりもっと強く、イエスの死は神の愛が信頼できるものであるということとを証しするためであることを教えてくれました。

足は身体の中で最も汚れた部分です。足を洗うということがキリスト教的な生き方の象徴として全てを表しているといったら、あまりにも不適切であると思われるかもしれません。しかし、私たちが心を開いてこの儀式に参加し、さらに互いの足を洗いあってみれば、この事を不適切だと思えなくなるでしょう。死と復活はたった一瞬の真実ではありません。まさに福音書の真実のように、いかなる時も生きとし、生けるものすべての生存の本質として明らかに示されるのです。自ら喜んで死と復活を受け入れるという事は生きるということの根拠を持つことです。ヨハネ福音書は真の生き方というものには毎日死ぬことが求められているという事を足を洗うという実例を挙げて示したのです。ヨハネにとってはこのことが重要なメッセージであり、これが、ヨハネをユウカリスト

(感謝の祭儀・聖餐) へと導きました。

人間は大人へと成長するに従って自分のことは自分で出来るように努力を重ねていきます。私たちが自立でき、誰からも干渉されないと思えるのは自分の身体を他人の世話にならず、健康的で衛生的に保つ事ができるからです。そして他の人も皆、同じように出来ると思っています。そのため、ひざまずいて人の足を洗うということにある種の屈辱感や滑稽さを味わいます。他人に足を洗ってもらうという事は多分、やっと勝ち取った独立や他人から干渉されないという自由を失い、人間としての尊厳を傷つけかねません。この儀式は私たちにいのちを少しばかり投げ打つということを教えてくれます。

ペトロはこれに逆らいました。しかし、この事がイエスと繋がっているための唯一の方法なのだ知らされます。互いが相手のために死ぬということを受け入れない限り私たちは決して本当の意味での贈り物としてのいのちを生きることにはならないのです。この事が罪と関連してくる事なのです。人を洗い、自分も洗われるということを受け入れるのは死を拒否し、常に他人を犠牲にし

て他人が死ぬ事によって自分を守ろうとするような罪とは相反する側にあることを意味しています。では一体、人間らしく生きるということは如何なる意味があるのでしょうか。

歴史の中で、現実起きた目を覆いたくなるような罪の惨たらしさは福音書の明解なメッセージを曖昧なものにしてしまいます。イエスの受難という歴史的な出来事の中に人間の内面にある悪への傾きの不可解さ、そこから何が生まれ、また、父の愛に対してイエスはどうか答えていったか等を見出すのは容易ではありません。しかし、困難ではあるが是非しなければならないことです。多くの司祭たちは神の子が来たのは働くためなのか、死ぬためなのかといった質問にたいして明解に答えることができます。イエスは死ぬために来たのだと答えるでしょう。いのちの与え主である神に対して自由に愛をもって応えることは、この世界という土壌に永遠のいのちという種が蒔かれ、そこに神の国が芽生えることを意味しています。私たちは死ななければなりません、死ぬことによってそのいのちよりもっと素晴らしいいのちが与えられるのです。

自らのいのちを捧げることを意味のあるものにするのは一つの体において、私たちが一つになることを願い、望むことです。また、互いが相互に帰属意識を持ち、地球にも属するものであることを証していこうという願望を持つことです。しかし、この真実は特権階級や偏見にあふれる複雑な社会構造によって否定されています。そのような罪を忘れるわけにはいきません。それは、聖木曜日、すなわち聖餐式は“一つである”ことについて言っていると誤解されていると私は信じています。聖木曜日はまず第一に“一つではないこと”つまり罪について訴えているのです。ブルジョア階級の自由主義者は別として誰もがこの人間世界には、ほんとうに“一つである”ということなど無いと分っています。したがってこの世界に於いて、まことに“一つになる”ことを実現するためにはそれを不可能にしてしまったこの世界に対して敢然と戦うという形を取らなければならないのです。私たちは“一つになる”ことを秘蹟としてしか表すことができません。聖木曜日の秘蹟のしるしは罪と愛のそれぞれが持つ本当に深いところまで私たちを導いてくれます。つまり、拷問台の死に色塗られた食事は愛の祝宴でもありました。

信仰にとって“一つになる”ことは神秘です。私たちが“一つになる”ことについて話すことができるのは、神について、または神が人間の歴史に働きかけてきた事柄に関してだけです。マッケイブルが言うように、人間における究極の“一つになる”ことは神の中にのみ、見出すことができます。本来、神は人々の中にある“一つである”事の中に見出されます。そしてこのような“一つになる”ことは私たちの世界には存在しないのです。貧しい人々と摂取されている人々が連帯して彼らを迫害する者たちに立ち向かう事が出来て初めて可能になります。しかしそれだけでは十分とは言えません。

私たちは罪に色塗られたプリズムを通して神を見ているので、本当に神を知ることが出来ません。この世界には罪があるために貧しい人々が優先的に愛されなければなりません。それ故、神の国は未来に向けて暗示やヒントを秘蹟を通してのみ表すことが許されません。それは、高い代価を支払わされる事によって示された暗示であり、その未来は簡単に描きだすことは出来ないのです。

パウロのコリントの教会の人々はこの複雑な状況を忘れてしまいました。彼らは明らかに死の刻印を退けたやり方で聖餐式を行おうとしました。が、それに

よってこの象徴的な意味の半分も失ってしまいました。パウロは彼らに言います。彼らがどう考えようと勝手だが、たとえ一緒に集まって食事をしたとしても“主の晩餐”を食べたことにはならないと。パウロはこのことが貧しい人びとを排斥したためだと分っていました。

聖餐式を行うとき、私たちは明らかにまちがったものをシンボルにしてこの儀式を行っています。しかし、この儀式を回心の一つの機会として罪のゆるしを求めるなら、私たちが望むところのものに到達することができるようになるでしょう。

聖餐式とは教会がすべての創造物に代わって、神に対して賛美の声をあげるという偉大なる捧げものなのです。神と和解した世界がすべての聖餐式の中にあります。パンとぶどう酒の中に、信仰深い人の中に、そして彼ら自身とすべての人々のために捧げられた祈りの中に・・・創造主に対する感謝の捧げもの、キリストの体においての宇宙的交わり、聖霊の働きの内にある正義と愛と平和の支配する神の国、そういった世界がやがて成就するだろうことを聖餐式は予

告しているのです。マッキイ(Mackey)が言うように、聖餐式を行うということ

は戦争に取って代わるべきもう一つの方法なのです。

私たちは自分が死から命へ移ったことを知っています。

なぜなら、兄弟を愛しているからです。

ヨハネによる第一の手紙 3:14

### 金曜日 悪の唇にキスをする

キリスト教徒が十字架を見る時、何か悲劇的なものを意識したりはしない。

それは、いのちとの健全な関わりだとする代わりに、否定的なものを伴った病的な偏見でもありません。それは、いのちに対する深い関心の結果なのです。

“受難物語を思い出す”ことは、いのちに対して創造的な行動を起こさせることになるでしょう。未来を予測する人たちは、将来起きる可能性のある核兵器による大惨事や環境破壊のすざましさを予見して、わたしたちの恐るべき未来を表現するのに“集団大殺戮”という言葉を使っています。こうすることによって彼

らは人々に行動を越させるきっかけをねらっているのです。これは危険な動きです。私たちは悲劇的な大破局の場面に登場する役者として過去を語るより、むしろ未来における犠牲者としての境遇について語る方が簡単だと分っています。しかし、どのように語ったとしても、迫り来る恐ろしい未来を避けるために必要な創造力を持つことにはならないのです。このような挑戦が可能になるのは、過去から現在に至るまでの苦しみについての記憶を持ち続けて生きる人々や、犠牲者に対して役立つような深い配慮を持ち、悪がこれ以上行われなような確実な生き方、考え方が出来る人々によってのみ可能になるのです。

本当の意味で十字架を深く見つめ、考えるということはまだ終わっていない苦しみの中に私たちを引き込んでいきます。しかし、十字架においては先ず第一に受諾を経験します。そして、このことは私たちの心の奥深くにある悪と向かい合う可能性をもたらしてくれるのです。いのちが十字架に架けられた男によって、また、そこへ架けた者たちによってもたらされた死によって表されているのを見ることができます。セバスチヤン・ムーアは、かつて次のように述べています。「十字架からの声が私たちに言っている。“あなたたちは分らないのか、

あなたたちが私を通して十字架に架けようとしたものは、あなたたちがこうなる事を恐れている人間の姿なのだ”ということ」。

イエスによってなされた死の受諾はいのちを否定して生きている人々への憐れみ深い愛の完全なる成就です。これは聖体拝領を生きる、究極的な段階です。私たちがいかに物事を捻じ曲げて考えようとも、これが現実の世界であり、私たちは神の愛に満ちた創造的な啓示から生み出された民なのです。いのちに対して“Yes”と言い、それを贈り物として受け入れることは、すべてのことが互いに繋がりのある一つの事として受け入れることです。もし、“すべてのこと”の中に人を排斥し、殺してしまうようなことが含まれていたとしても、それさえも愛を持って受け入れなければならないのです。

私たちは自分のいのちを少ししか愛していないので、悲惨な出来事を神の愛とは両立しがたいものとして見がちです。そのため、死を遠ざけてしまい、助けることができないのです。私たちがこの苦しみの気持ちを捧げることが出来るようになった時、その時こそ神を善意の神として悪意を持たずに受け入れる

ことができるようになるのです。そのような瞬間が訪れる時にはイエスの憐れみによってもたらされた死が人間にとって神秘として捉えられ、神にとっては苦しむ者と共にいる存在としてご自分を示される機会となります。イエスの死によって、はかなく、死を免れない人間のいのちが、神にとって最も大切なものであることを私たちに気づかせます。

旧約聖書によれば、聖霊とは神から来るいのちの力であると理解されています。新約聖書によれば、聖霊は復活によって示された力と理解されています。この二つの間には深い関連性があります。ここで問題となっているいのちとは無条件の愛として聖霊を経験したこととして理解されます。そのいのちは余すことなく完璧に生き抜かれたいのちです。死に捧げられた愛だけがこの現実の世界で無条件（絶対的）の愛といえるのです。神のいのちはイエスの死によって、つまり、死に対していのちを明渡すほどの愛として表されたのです。死は復活に向かって花開かなければなりません。

私たちがそのいのちを余すことなく、徹底的に生き貫くことができるのは復

活による希望のためではありません。それは私たち自身が壊れやすく、死を避けることができないいのちを受け入れ、肯定し、愛することでこのいのちを完全に生き貫くことができることに気づき、それによってこの世界に復活の希望を持つことができるからです。これが、この章のはじめに引用したヨハネ第一書簡の伝えるメッセージが意味するところでは、イエスが死ぬ事によって示した愛の中に神を見出すことで、このように生きていく事ができるのです。

私は十字架からイエスを復活させた神の行いを抜きにして理解できるものがあると言っているのではない。福音書の物語はさレこうべの丘の後で弟子たちが陥った絶望感を激しく語っています。イエスが弟子たちと共にいた時はイエスの完全さ、その活動的な様子は弟子たちの奥深くにある人間性を抵抗無く呼び起こしました。人間は生きとし生けるすべてのものに関わりたいという、果たせない願望を持つ者として生まれてきています。しかし、自尊心が傷つけられたことによって、この願望が損なわれ、そのまま“保留状態”に置かれてしまつたのです。この事が私たちにとって罪となっています。イエスと共にいる事によって、人々は自分たちの願望が再び満たされるのを感じます。さらに、生き

生きと生きることによって喜びを感じ、人間としての本来の姿を取り戻せるのです。そのため、イエスがローマ帝国の権力によって、ハエを叩くように簡単に排除され、片付けられてしまったことで彼らの心は荒廃してしまいました。騙されていのちと愛と神を信じ込まされたのだと感じたのに違いありません。

普通、私たちは死というものを経験しません。その喪失感を経験するのです。私以外の他人が死に、私は生き続けます。しかし、イエスと弟子たちの関わりはあまりにも深く強烈であったため、イエスの死によって彼らが死の経験、大きな絶望感を経験したといっても言い過ぎではありません。彼らが再び立ち上がることが出来たのは、そこからです。その生き方は背後に死というものを担い続けている人の生き方でした。つまり、もはや死等の恐怖に支配されない生き方のできる者となったのです。イエスの復活がなかったら、弟子たちにこのような影響を与え、イエスが神について語ったことは正しかったと彼らが断言するようなことはなかったでしょう。

しかし、彼らがイエスの死によって発見した真実は、すでに存在していたも

のでした。

ここまで、苦闘しながら福音書の真実について読んできたので、私たちはそれを誤解するようなことは少ないと言ってもよいかもしれません。しかし、伝統というものは曖昧なもので、私はここで、いくつかの誤解を生みやすい点について触れておこうと思います。

イエスが生涯にわたって貫かれた自己を解放した生き方は、移り変わるはかない世界や人々から距離をおいた生き方の痕跡を残すものではありません。後世、キリスト教的伝統はストア学派が唱えるところの“自己放棄”という思想に影響されなかったとは言えません。問題点は“この世界は虚しい”、そしてすべてのものは過ぎ去って行くということをどう捉えるかにあります。近代西洋は東洋の知恵についての理解が十分ではなく、東洋の知恵がはかないものから来る曖昧さを容認しているということをストア学派と同じように拒絶しているのだと捉えています。このような“放棄する”ということの解釈はハンス・アース・ホン・バルタザルによれば、キリスト教にとっても、一般の人々にとって

も最も有害な敵としてとらえられています。なぜなら、それは地上のはかない全てのいのちとの純粋な交わりを無力なものにしてしまうからです。ローズマリー・ホートン(Rosemary Haughton)はイエスの受難においてストア学派的なものとは正反対にある動きについて、私たちの関心を引きつけます。すなわち、イエスを人々の反応や必要に対して細心の注意を払った者として描いています。イエスの関心ごとは最期まで彼らに起こっている事柄についてでした。

この“放棄する”ということの論点にはもう一つの意味があります。それは聖金確日のメッセージの中心へと導いて行きます。つまり、ゲッセマニの園でのイエスの苦悶に始まり、悲痛な叫びで（マルコによれば、イエスの死で）最高潮に達します。イエスの最も深い苦しみ、つまり神に見放されたという事実を目の当たりにした時、私たちは感情的に行き場の無い、息詰まり感を抱くようです。思い返してみれば、それは解明されていない神のイメージから来ているのではないかと思われれます。私たちはされこうべの丘で明らかにされた神とは違った神を持ち続けているのです。イエスの祈りに応えて“干渉”しようとするればそうできた神がそうしなかったと思うことで私たちの心は甚だしく動揺して

しまうことに気づいたのです。それ故、私たちは神がイエスを見捨てたということの本質を否定してしまうのです。

これは、されこうべの丘において示されたいのちを与えるという真理への道のりを閉ざしてしまいます。その真理とは愛のない世界では神の失墜は現実のことだが、この事で神を排除することはできないということです。昔からの伝統的な考え方では、神は罪人、呪い、墓に葬られるといったことから遠い存在でした。そのため人々を絶望へと追いやり、神から見捨てられたと決め付けられた者を遠ざけることを正当化してしまいがちでした。パウロによれば、父の愛に常に誠実であったイエスが私たちのために“罪とされた”のでした。イエスは心の中で愛が滅びた世界をそこから遠ざかることなく経験したのです。イエスは想像もつかない全くの暗闇の中で死んでいったのです。

このことは私たちの歴史の中で最も恐ろしい瞬間であり、また最も美しい瞬間でもあります。“我が神よ、なぜ我を見捨てたまいしや？”この“神が見捨てる”ということの意味のすべてが曖昧なのです。イエスがあのように死んだことに

よって神が不在しているような状態は人間にとってあり得ないのであり、いかなる罪も、神の愛の親密さや私達との交わりを願う神の心を変えさせることはできません。また、いかなる絶望も正当化できるものは何もないのです。神は罪を咎めることなく、全ての人々の苦しみを憎んでいることを私たちに悟らせます。

さらに、イエスの死に関して伝統的に言われてきた言葉に“犠牲” (sacrifice) があります。この言葉が自分自身や自分の人生を愛せなかった人がイエスが使われたように語ったら危険です。私たちはイエスの生き方、すなわち感謝をもって生きたその生き方についてすでに話し合いました。つまり、全てのいのちがイエスの深い信仰に対しての贈り物であり、それ故、感謝を持ってイエスは受け取ったのです。イエスが全てのいのちに対して“Yes”といったことで、犠牲的な道へと導かれたことを私たちは把握しなければなりません。愛を恐れている人々を心から愛することは非常に高い代価を支払わされることなのです。他人を愛し、彼らの中に“他者”であることを真剣に受け止め、そのことを通して自分自身を見つめ、それを受け入れていくことは破らの生き方、彼らの痛

みを自分自身の一部とすることです。これがイエスの犠牲的な生き方の意味するところなのです。

‘神の苦しむしもべ’としてのイエスのこの方法は敵に対する愛の倫理、善をもって悪に打ち勝つという倫理を打ち立てたのです。このようなイエスの生き方を説明するのにふさわしい言葉を見つけることは難しいことですが、私たちにとって大事なことです。日常、私たちが使っている語彙が知らぬまにとげとげしくなってしまうため、自分自身を過小評価してしまいがちです。もっと悪いことに言葉が意図を形作る作用があるため、不完全な表現をされることによって私たちは本来持っている洞察力を失っているのかもしれません。私は非暴力による戦術や策略についてどのように話したら良いのか考えてしまいます。いかに最善の方法でなされたとしても、それがひどく効果的に聞こえることによって、愛による答えの本来の意味をごまかしてしまいます。非暴力ということとは物事を行うのに最良の方法かもしれませんが、それを受け入れる理由にはなりません。それは敵が愛されているから受け入れられるのです。

このことを明らかにする上で、不正な抑圧者に対して立ち向かうために、ある所で昔から行われている方法について紹介しましょう。それは単純に抑圧者の戸口に出かけていき、餓死するまでそこに居つ続けるのです。もし、救済がすぐに行われなければ、抑圧者はその人間を死に至らしめたということで公然の罪を犯したことになるのです。イエスはそのように死んだのではありません。

聖霊によって動かされ、私たちの教会はようやく最近になって公に平和と正義を追求することを言明しました。この追求なしに真の福音化はないと気づいたのです。しかし、これを虚しいものに終らせないようにするにはキリスト教共同体はいのちを愛し、敵をも包み込む愛で罪さえも呑み下されてしまうような人間の内部から萌え出るようないのちでもって生きなければなりません。このことだけがこの時代を救う事ができるのです。非暴力ということがいかに効果的であってもそれだけでは足りないのです。非暴力を行う人は彼らの死の責任を加害者の上に負わせてしまうのです。私たちは加害者や全ての人々を愛することに私たちの死を適用させるという、さらなるステップアップを目指して

います。

1945年にナチスによって処刑されたデートリッヒ・ボンフェファ  
(Dietrich Bonhoeffer)はイエスの神に対する応答の中に含まれているある感情  
を信仰告白という形にして私たちに残しています。

神は信じます。

神はすべてのことの中から最悪だといわれることの中からさえ

良いものをもたらしてくださいます。

このために、神はすべてのことに最善を尽くして仕えることができる者  
を必要とされたのです。

私は信じます。

あらゆる危機に見舞われたとき、私たちがそれを乗り越えるために

神は十分な力を必ず与えてくださることを。

しかし、神はそれを前もって与えては下さらない。

それ故、私たちは自分自身に期待するのではなく、神だけにすべてを委ねます。

未来に向けた私たちの不安は、そのような信仰に預けてしまいます。

私は信じます。

わたしたちの失敗や間違った行いでさえ、無益なものではないということ。

良い行いと思えるものに対処するのと同じように、神は私たちの間違った行いに対処することをそんなに困難なこととは思われないのです。

私は信じます。

神は“時間を超える方”ではなく、むしろ私たちの真剣な祈りと責任ある行いに対して待ち続けて下さり、それに応えてくださる方であるということ。

この日の主要な典礼は十字架への礼拝です。多くの人々は十字架の道行きと

呼ばれる祈りに参加することによってこの日の典礼に入っていきます。伝統的な道行は 14 の場面から出来ています。私たちのもう一つの十字架の道行きは序文でも触れたように、いままでのとは違って、一週間のテーマとなっています。すなわち、これらの 5 つの絵が持つイメージは互いに分かち合った思いを引き合わせ、さらに深めていく事が出来るというメッセージが希望と共に再現されています。

私たち二人は、かごの中の鳥のように歌うだろう

あなたが私に祝福を求めた時、私はひざまずき

三つの許しを請うであろう；私たちは共に生き、祈り、歌い、

そして昔話をして、うわべを飾った蝶ちょを見て笑い、

ごろつきたちが裁判所の話をするのを聞き、

我々も彼らと共に話をするだろう

誰が負け、誰が勝つか；誰が入って、誰が出たか；

すべての不可解さを知りつくした振りをして、

まるで、神のスパイであるかのように。

(シェークスピア　リア王)

土曜日　　私たちの中に神を復活させよう

イエスの原理、死を通り抜けて生きる生き方の秘密を、進んで受け入れる人びとは、未来がどのようなものであるか誰よりも分っています。彼らは、確実に実現するだろうと信じている復活のことを、自分自身にも、他の人たちにも具体的に目に見える形で描き出すことは出来ません。未来を描くことは本来、信仰とは関係のないことです。反対に、真の信仰というものは、神がもたらす未来と同様に、神は信頼できるものであるという知識を持つということです。そして、信仰は、神秘を神秘のまま受け入れるということです。しかし私たちは、しるし（シンボル）無しには生きることができず、信仰深い人びとは神が私たちの世界にもたらしてくれるであろう未来について、いつも夢をみているのです。もし彼らが詩人なら、彼らの夢は私たちを豊かなイメージで養い満たしてくれるでしょう。そして、生きる方向も示してくれるでしょう。

イエスはそのような道案内としてのしるしを受け、そのいのちと死を通して新しい意味を与えました。神の国とは、全ての人びとが兄弟姉妹として親しい関わりのなかで、あらゆる抑圧から解放され、すべての涙が拭い去られるという最終的な救済の比喩（メタファー）です。この完全なる共同体において、

身体の復活とは、完成された救済と男性や女性の特色を持つ肉体的な存在としての、一人一人の幸せのしるしとなるものです。それは人の喜びを自分に見出す源となるものです。

そして、最終的に新しい天と地は、健全な自然環境への変化を象徴し、本当の意味で人間の救いを永続的に経験できる状態を表しています。

この時代に、希望を育むためのイメージを表現する詩人がいます。

いつか、人は もっと気安く触れ合い、話し合うことができるようになるだろう、

そして、愛することは 息するように自然で、日の光のように暖かく

人は 自分自身を解放するだろう、

紐の結び目をほどくように、

胸を開き、あくびをし、背を伸ばし、指を広げるだろう、

海に戻った海草が、葉を広げ、縮れを伸ばすように、

そして、仕事は 空を飛ぶかもめのように 容易で速やかで

遊ぶことは かもめが舞い降りるように 緩やかで静かだろう

時計は時を刻むのを止め、それを不審に思ったり、心配したり、気付いた

りする

者はいない、

そして人は なんの理由も無く 微笑み合うだろう

たとえ 冬でも、雨の中でも。

しかし、復活を信じると言うことは、夢の中の出来事を信じることではありません。現実の夢から目覚め、夢の中にある現実へと向かうことなのです。それは、復活したイエスの真実を世界に向かって宣言する、という生き方なのです。そして、この生き方とは、イエスが人びとに教えられた神の国に、神の観念を持ち続けることなのです。復活を信じると言うことは、いのちの尊厳やいのちそのものが脅かされている神が愛する人びとと深く関わっていくことなのです。イエスの復活は、その生涯と死から切り離して考えることはできません。

新約聖書の中で、御父がイエスに行った新しいことは、まず最初に、何よりもイエスが生きた神の国についての宣言が本質的なものであり、変更がきかない重大なものであるということを認識させてくれます。イエスが神について語ったことは正しかった。そのことはイエスの復活の真実がキリスト教徒の生き方の中に、誓いと希望を持って証しされています。

キリスト教徒がイエスの足跡のなかにある祈りや解放に従う限り、復活に対する信仰の危機はありません。しかし、それができない時、私はエドワード・スキルベック（Edward Schillebeeckx）の中にある強い気持ちを思い起こします。

一方で、私は心から言わなければなりません、

男や女を軽蔑し、抑えつけ、辱しめを与える神を信じる

くらいなら、神は真実であるなどと考えないほうがよい。

永遠のいのちなど信じないほうがよい。

私たちの中に神を復活させるということは、リア王がコーデリアに言うように、私たち自身が物事の神秘を引き受けるということなのです。それは全ての物事を、特に神秘を運ぶものとして、人間を見つめることです。神秘は宇宙の中心に、顕在する全ての中にあります。それは奥深いところで触れることが出来、約束であり、全てのいのちに与えられた真理なのです。もし私たちが、創られた世界を尊び慈しむなら、それがもたらしてくれる約束を感じる事が出来ます。たとえその尊敬する心を獲得するためにどんな代価を支払おうともそれは価値があることを知っているからです。自ら進んで死ぬことによって、より以上のいのちを生きることが出来るかもしれないのです。そして死を通過した生を示されたキリストの道へと入ることが出来ます。

この章の最初に引用したテキストはリア王の最期の場面から引用したものです。年老いた男が、真の愛を見誤った自らの失敗によって苦悩し、精神を病み、やがてコーデリアの強く、まことの愛に気づき癒されます。赦しの喜びのうちに、リヤ王は正気になって将来を見据えます。それは復活の喜びに生かされた世界です。神聖なコーデリアの愛を通してリヤ王は、全てを包み込む慈悲を知

ります。人は互いに支えあい、常にゆるし合うことがどんなに必要か知ることになります。彼は深い憐みの心を人々に抱き、自らの罪の愚かさを直視します――着飾った蝶。人間とは傷つきやすく、こわれやすい存在だからこそ美しい。しかし、そのはかない美しさを信じることはできません。保身のために、自分の財産や肩書きなどでわが身を装い、肝心なものを隠します。リヤ王の悲しみは物ごとに潜む神秘的な感覚からわきあがり、赦しは私たちの呼吸の中に神への愛として息づきます。

私たちの中に神を復活させるには、社会にしっかりと根付き、何の疑いも持たずに物事の現状を打ち砕かなければなりません。私たちは自分自身を超える必要があります。それは逃げたり、避けたりすることではなく、日々の生活の中にある変化の可能性を見つけ出して行くなかにあります。そのことについてはウオレス・ステイブンス (Wallace Stevens) の「青いギターを持った男」の書き出しの部分によく表されています。

男はギターに屈み

日は緑色だった

彼らは言った「あなたは青いギターを持っている」

「あなたは、それをあるがままに弾こうとしない」

男は応えた「あるがままのそれは 青いギターで変えられた」

そこで彼らは言った「弾きなさい、あなたは弾かなければなら  
ない」

その調べは私たちを超え、私たちの上に

青いギターから奏でられる調べは

まったくそのまま、それがあがるがままに。

もしも、イエスのようにすべてのものを、贈物として受け入れ、何事にも捕  
らわれずに生きることができたら、すべてのことから解放されて、新しく芽生  
えてくるいのちの豊かさの中で自由に生きていくことが出来るかもしれません。

豊かさ（肥沃さ）ということは、復活徹夜祭の大きなテーマとなっている。

この典礼は自己受容の典礼として考える必要があります。聖木曜日や聖金曜日

の典礼とはまったく個別に発展したものです。後者はイエスと関連した聖なる場所への巡礼から発生しています。復活徹夜祭の典礼は初代教会の重要な典礼でした。それは、ユダヤ人の過ぎ越祭の食事の影響を受け、すべての創造物の心といのちの復活の朝の歓びに満ちたお祝いの儀式となりました。何世紀にも渡ってそれは消滅しかかっていましたが、1956年に勇気ある試みによってそのすべてが蘇ったのです。

典礼の形態が定着するには何世代もの時間の経過が必要です。フィリピンにおいても他のカトリック国においてもこの徹夜祭は典礼暦に誇り高く定着していません。しかしその時は来るかもしれません。1970年に改良をはかるためになされた典礼についての改訂が、この儀式の復活を遅らせていると非難されています。この改訂は甚だしい数—12箇所にも及ぶ—の朗読を削減していました。その上1956年に忠実に再現された、いのちと豊饒、死と新しいいのちについての大切な象徴的なものも削減してしまったのです。

象徴的なものを骨抜きにしてしまったことについて話す事は意味のあること

です。何故なら 1956 年に再現された典礼は極めて性的であったためです。しかしそのことが私たちの中にある世界を変えて行く力を祝福することが出来るのです。すべてのしるし（シンボル）は、創世記の最初の章から来ています。洗礼盤は母なる教会の子宮を象徴しています。男性を表している、灯されたろうそくは司祭によって高く掲げられ、母なる子宮の奥深くへと差し込まれ、受胎します。ろうそくが最も深いところに達したとき、司祭は水の上に、ギリシャ文字である 'psi'（生を表す“psyche”の最初の文字）の形で息をふきかけます。それが象徴するのは、多産と再生です。処女なる教会の受胎は太古の水、混沌とした水がいのちの育みの場になったと事に由来します。私たちはキリストを中心とした創造の物語を与えられています。新しい仲間の誕生、洗礼志願者たちは宇宙の誕生とつながっています。この力強く、原始的な典礼は夜の暗闇の中で執り行われます。

それとは対照的に、1970 年の典礼は、司祭はろうそくを水の中に低く入れれば良く、神学的にも完璧な祈りと共に行われます。つまり洗礼によってキリストと共に葬られたすべての人びとが新しいいのちに蘇るようにと祈りながら行

われるのです。昔の象徴的な所作が伝えようとしていた豊かさは失われてしまいました。それは非情に残念なことです。

性的であるということは人間的であるということです。それは私たちが傷つきやすいということのしるしであり、人間として成長して行くうちに互いに慈しみ深くなるということです。性的であることと死には関連性があります。両者が伝えるメッセージは一つで、同じことです。私たちのいのちは自分自身のもので無く、もっと偉大なものに属し、そして幸せはその偉大なものに身を任せることの中にあります。無意識の内に性的なものをとるにたりないものにしてしまったことは、その真の意味を認めることが出来ないということです。互いの関係を認め、この世界のいのちである肉体を徹底的に受け入れる事によって、私たちは性を創造的に生きていくことができるのです。

古い時代の復活徹夜祭は、その象徴とするものを選択するのに未熟ではなく、的確なものでした。性的なものと死はあまりにうまく絡み合っているので、一方が失われてしまえばもう一方の意味もなくなってしまいます。復活のメッセ

ージは死を通り抜けたいのちの

豊かさを明らかにしています。人びとのなかに働く聖霊のいのちは死を避けたり、保護したりしません。いのちのために死を進んで受け入れます。希望、豊饒、そして苦しみは相伴うものです。もっと熱烈に、無条件にいのちを愛するなら、創造の痛みや、あがなえぬ死を強く経験するでしょう。愛し、希望を持つことによってこの痛みから解放されます。この痛みに免疫を自分に持たせようと、むなしい努力をすることで、自分を不毛な、生きながらの死という状態に閉じ込めてしまいます。十字架上で死んだイエスは、いのちというものを具体的に表現しています。私たちは、彼を十字架にはりつけることによって、死というものを具現化します。

復活徹夜祭だけでなく、すべての聖餐式、すべての秘蹟（サクラメント）は復活した世界に対する世界的なお祝いなのです。サクラメントは私たちに現実における足がかりを提供してくれます。イエスは、十字架にかけてしまうような世界によって排斥されました。私たちはそれを許すような世界に犠牲者と共

に対峙することによって、今もイエスと出会うことができます。死から抜け出たいのちは、それでも死から外にあるいのちとして残ります。永遠にその生き方に刻まれて。彼は生きている、しかし“殺害されたことによって”（黙示録 5:6, 9, 12; 13:8）それ故、聖霊の力によって照らされた十字架は、最も素晴らしい復活の描写として、また、キリスト教の卓越した象徴として私たちに残されています。そこには愛によって飲み込まれてしまった死が存在します。キリストが愛したように愛することによって私たちは復活を経験し、それは永遠の真実として残るのです。